



パストラルハープ Vol.2

病床にある方のもとに、“生のハープと歌声による生きた祈りを届ける”という、「祈りのたて琴」(リラ・プレカリア)と出会い、2年間の養成講座を修了した後、2018年の春からベトレハムの園病院でボランティアとして奉仕をさせていただくことになりました。

活動の内容が具体的にどのようなものなのか、事前に職員たちに説明をしてほしいと求められ、3月も終わりに近づいたある日、とても緊張しながら病院の門をくぐりました。なぜなら、同じ活動をしている先輩たちからは、「エビデンスを求められて困った」、「病室には入れてもらえず、ロビーで弾いている」等、他病院での体験談を聞いており、この活動の主旨を医療者の皆さんに理解していただくには、自分は全く言葉足らずで非常に心もとない…と感じていたからです。

しかし、最初に通された部長室で、看護部長さんが「いのちを慈しむ～慈生会の誓い」の額を指さして、「私たちの病院はこれを大切にしているんですよ」と教えてくださった、その4つの誓いの言葉は、まさにパストラルハープが大切にしていることとぴったりと重なる！ということに気づいて大いに勇気づけられたことを憶えています。





その日、病棟のスタッフの皆さんが集まってくださり、たどたどしいプレゼンテーションを聞いてくださいました。

- コンサートや演奏会、パフォーマンスの音楽ではなく、患者様に寄り添うための手段として音楽を用います。
- 患者様に負担をかけないようにシンプルなメロディーを、患者様の呼吸やエネルギーに合わせて弾き、歌います。音楽の進行を導くのは、あくまでも患者様です。
- 患者様の意識が目に見えるレベルではなくても(昏睡状態等)、そのいのちが最期の時まで尊ばれることを願いつつ、祈りの音楽を捧げるスピリチュアル・ケアの一つの手段です。音楽療法のように治療・回復を目的にはしていません。

これらのこととお話しさせていただいた後、何人かのスタッフが実際に長椅子に横になってハープの音を聴いてくださり、「こんなふうには身体に響くんですね」、「テレビなどで見る(聴く)ものとは全然ちがいますね」などと体験した感想を言ってくださいました。

かくして翌週、4月6日から正式にボランティアとして、毎週一回、患者様のベッドサイドに行かせていただくことになり、今に至っています。

このように、驚くほどスムーズに、また好意的に受け入れてくださった病院への感謝と、ここに導いてくださった神様への畏れは、今日に至るまでずっと続いています。

